研究、数々の審査会で入選し、作品は東宮職・皇后職御用品ともなる。大正3年第8回文展で初入選し、その後も文展・帝展で活躍のかたわら、教科書の挿画も手がけた。戦後は地元に帰り、創作に励んだ。昭和49年（1974）歿、93才。

年の瀬に・・・平成28年12月14日

今年一年、長泉寺のホームページをお読みいただいた方々に心より御礼申し上げます。

「日々の出来事について感じたことをもっと気軽に書かれたらいかがですか」と応援して下さる読者の方もおいでですが、私の性格上そういう訳にもいかず、書いては掲載する時宣を失ってしまい紙屑かごにポイした原稿は数知れません。加齢とともに遅筆になった事は否めない事実です。

一度文章を書いたら推敲を重ね何度も文章を練り直す。というのが、私が小学生の頃から教わった作文の書き方だったように思えます。

私もお盆の前にこのホームページに記述させて頂きましたが、自分と仏様との心の交流は他人にお話してもなかなか伝わりません。けれどそれは、それぞれ個人の心の問題ですから、それはそれで良いのだと思います。

ところが、最近の若者はとにかく感情の赴くまま、すらすらぺらぺらと書き驚くばかりです。うらやましくも思えます。

風邪をひき、3週間もぐずぐずした生活をしてご迷惑をお掛けしておりますが、年末年始の行事は例年通りですので、どうぞお参りにお越し下さい。

お待ちしています。

年の始めに・・・平成29年1月1日

あけましておめでとうございます。

今年もよろしくおねがいします。ご家族皆様方のご健康とご活躍を心からお祈り申し上げます。

各人、みんなと仲良く楽しく、幸せに過ごせる一年になりたいものです。

さて今年は酉年。鶏と聞いて、一番最初に思い出すことわざは皆さん何でしょうか？私は高校生？の時に教えていただいた、「鶏口（けいこう）となるも牛後（ぎゅうご）となるなかれ」と言うことわざです。

これにはいろいろな解釈があるようですが、大体は次のような意味合いでしょうか、、。それは、「小さな団体であってもその頭領になる方が大きな団体の末端にいるよりはいい」と言うことだろうと思います。

昨年、このことわざ通り、自民党の一議員でいた女性が都知事選に出馬して、みごと都知事になられた方がいました。小池百合子さんです。彼女こそまさしく「牛後ではなく鶏口」となった女性のリーダーではないか、代表格でないかと私は思っています。昨年はいろいろな意味で都知事さん大活躍の一年でありました。今年も「都民ファースト」「市民ファースト」で私達の為に活躍をしていただきたいと思っています。

さて、これは中国の「荘子（そうじ）」と言う書物の中に出てくる例え話でありますが、「木鶏（ぼっけい）に似たり」と言うことわざがあります。

・・・紀渻子（きせいし）という男が王のために闘鶏を育てていた。闘鶏を訓練し始めて十日ののち、王が紀渻子にもうだいじょうぶか、ときいた。紀渻子は、まだ鶏は虚勢をはっているからだめだ、という。また十日してきくと、まだ相手の動きに心を動かすことがあるからだめだ、という。さらに十日たってきくと、もうよろしいでしょう、と答えた。そのときの闘鶏のようすが、ちょうど木鶏のようであった。これを見てはどんな相手でもこれと闘う気力を失い、逃げ出してしまった、というのである。・・・。

見たところ、木でつくった鶏のようだ。敵意を持たないものに対しては、これに反抗する敵はない。無心で他に対することが、万事を処理し、困難に打ち勝つ最上の方法であるとのたとえです。。

一年の間には面白くないことも多々ありますが、木鶏の如くに無心にして泰然自若「気に入らぬ風もあろうに柳かな（仙厓和尚（せんがいおしょう））」の心境でいきたいものです。

今年もよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

寒行・・・平成29年1月25日

おはようございます。

寒い日が続いています。皆様いかがお過ごしでしょうか?。雪の降る夜はなぜか過ぎ去った懐かしい思い出がよみがえります。

これは昭和39年東京オリンピックの頃のお話です。当時、私は小学5年生でした。そしてその頃、長泉寺では高校生から30才くらいになるまでの兄弟子10名程と一緒に生活をしていました。

ちょうど大寒から旧正月にかけての一番寒い時期になると、兄弟子達は寒行といって大きな声を張り上げ経文を唱える修行をするのでした。夜8時になると、秋葉堂の建っている秋葉山（小高い丘）に向かってぞろぞろと歩いて行きます。頭にタオルで鉢巻きをしたり、お寿司屋さんの職人さんのようにぐるり廻したり、ターバンのように巻いたり、それぞれ防寒と気合の意をこめた格好です。皆「どんぶく」という綿入れ姿であった記憶がします。

リーダー僧が「まかはんにゃはらみた心経～」と声高に唱えると、全員で星空に届けとばかりの大声で般若心経を練習するのでした。大悲咒（だいひしん）や観音経（かんのんきょう）…とお経の練習は続き、次第に体が温まってきたかのように顔は赤くほてっていました。子どもの私はお経は読めず、声を張り上げることも出来ませんでしたが、真っ暗な秋葉山、しかもすぐ側はお墓です。そんな場所について行けることは大きな冒険でした。なにか大人になったような気分で、とても嬉しくワクワクしたものでした。秋葉山からは近所の民家の灯りが静かに見えるだけで、この冬空の空間を私たちお坊さんだけが独り占めしたような不思議な満足感を覚えたものです。

寒行は朝の勤行と同じほどの長さ、つまり40分程続き、終わると急に寒い寒いと下りてきて、台所の炉辺にまるく座り熱い砂糖湯を飲むのでした。「砂糖湯を飲み過ぎると腹が痛くなるぞ！」年長者の淑郎さんはいつも私に言ってくれるのでした。バチバチバチと赤く燃える囲炉裏の炎でみんなの

顔は一層赤々となり、わたしもふうふうと砂糖湯を飲んでは幸せな心地でした。

九時となり、開枕（かいちん）。就寝の時間です。木版を鳴らしてまた唱えます。生死事大。無常迅速。各々宜しく醒覚して慎んで放逸なること勿れ。

こうして冬の寒行は10日間程も続いたのでしょうか？よく思い出せません。寒行のおかげで長泉寺の兄弟子たちは全員お経が上手です。ありがたいことです。

鐘の音・・・平成29年2月22日

おはようございます。

お寺の境内の梅の花もほころび始めました。とは言え朝夕はまだまだ寒さが厳しく昨日などは囂々と風が吹き、朝の鐘を撞く時には鐘楼から飛ばされるのではないかと心配いたしました。

さてこの季節の言葉に三寒四温という言葉がありますが何を基準にして三寒四温というのかが私にはよくわかりません。ともあれ寒い日や暖かい日を繰り返しながら冬と春が綱引きをしながら少しずつ春がやって来るという意味なのでしょうか。夜が明けるのも早くなり6時の鐘を撞く時には散歩をする人影が見えるほどになりました。

さて先日テレビを見ておりましたら福島県の郡山市に「いぼなし梵鐘」呼ばれる鐘があることを知りました。ご存知のようにお寺の鐘には、ぼつぼつとイボのようなものが鐘の上に付いております。その数は一〇八ちょうど除夜の鐘の数と同じ数がついています。そのぼつぼつがない鐘が郡山市の如宝寺にあって、それは国の重要文化財に指定されているということを知りました。まだ拝見をした事はありませんが、是非そこのお寺にお伺いをしてどんな音がするのか聞いてみたいと思います。

と申しますのは鐘を撞いていてわかることですが、天気に音は非常に左右されます。雨の時にはやはり湿った音がして晴れればカーンという高い響きになるようです。それから長泉寺の鐘だけか

もしれませんが、毎日撞いているうちに振動で鐘を吊っている鍵の部分から少しずつ左右に振れて撞木と鐘の当たる角度が微妙に異なる事に気づいてきました。ですから毎日同じ響きで鐘を撞くそのためには意外にお坊さんたちも見えない苦労して撞木と鐘がきちんとなる角度に合っているか、今日の天気はどうか、風向きはどうか、工夫しながら鐘を撞いている事を思っていただければありがたいと思います。それから撞く人の性格ですね、これがよく表れると思います。

何でも一つの事を一生懸命するということは難しい事です。毎日毎日の繰り返しが同じようで同じでない。私たちの人生も同じだと思います。同じように毎日毎日生活をすることの大切さをこの難しさの中から私は学ばせていただいたように思います。

明日また6時に鐘を鳴らします。どうぞお聞き下さい。ありがとうございました。

東日本大震災七回忌追悼大法要・・・平成29年3月11日

今年は、東日本大震災から満六年、七回忌でした。長泉寺ではこれを祈念し「東日本大震災七回忌追悼大法要」開催しました。

法要後には震災後から鎮魂像を続けている大沼敏修先生（市内高倉在住）による講演と柴田町「明了館」の皆様による合気道「古流・夢想神伝流」が行われました。

七回忌大法要・・・長泉寺本堂

今の私に出来ること

このたびは方丈さんから本堂にお招き頂きまして誠に有り難いことと恐縮しております。西根から参りました大沼敏修と申します。

なにぶんにも不慣れであります。メモを見ながらの話になることをお許し下さい。

6年前の今日、3月11日午後2時46分私は山で薪を切っておりました。その時揺れを感じました。ご存じの通り天地が今にも裂けるような強く長い揺れでした。強烈な揺れの最中、土煙がもくもく。辺りが一気に暗くなり、あっという間に視界がゼロとなりました。

「山崩れだ。終わりだ!!」

と観念した程であります。

視界を遮ったのは杉の花粉とわかりました。揺れが杉の花粉を一斉に大量にまき散らしたものでした。あの時の恐ろしさは忘れられません。思い出すと今でも身体が震えます。

3.11震災が「風化している」と言われます。が、「そうでしょうか?」風化しているのではなく風化させていると私は感じています。

6年前に戻ります。

震災発生後、真っ先に駆けつけたのは石巻でございました。恩返しをするために軽トラックの荷台に、米、味噌、水、おにぎり、かき集めたガソリン、テント、寝袋、一輪車にスコップ、バール、斧を積み込みました。石巻は私が20代に4年間勤務した勤務地でありました。

当時お世話頂いた恩人、知人、友人が被災していましたし、家内の生まれ故郷でもあります。家内の肉親は、避難所に逃れていました。

遠回りと迂回を重ね、震災発生後、六日目、3月17日にたどり着いた。その石巻は、まさに想像を絶する惨状でございました。

言葉にならず耳を疑い目を覆うばかり

「ここに人の暮らしがあった?」

とはとても信じられない現実が目の前にありました。

北上地区では、土台の石、基礎コンクリートの一欠片も残らない、まるで月のクレーターを思わせる惨状でございました。それを見た時、唇はワナワナ、膝はガクガク思わずその場にしゃがみ込んでいました。恐ろしくすざましい津波の破壊力。地獄絵図より、もっともっとむごい有様でございました。

北上地区に続きまして向かった先は、旧北上川河口に近い川沿いの住宅地でございました。ヘドロの掻き出し作業の手伝いです。かつての同僚た

ちも駆けつけていました。そこのお宅は木造二階建て一階には茶室もある和風住宅で大正生まれのご夫婦がお二人で住んでいたお宅です。一軒だけぽつんと残っていました。

出迎えてくれた息子さん「親父も母ちゃんも避難所では終わりたくねぇ。ここで死ぬ。の一点張り、仕方ないんでさらっとリフォームして、立ち退きになるまでの間だけでもと思いまして・・・。うちは門の前の物置が波きりの役目をしたんですよ。ご近所は津波をもろに受けました。うちだけ残っちゃって・・・」と疲れ切った表情で話してくれました。

私たちは見るのも聞くのも気の毒で、辛くて胸が苦しくなるばかりでした。ヘドロの掻き出し作業は家の中から手をつけました。どの部屋もヘドロだらけコールタールのような黒いドロドロの中にありとあらゆる物がおもちゃ箱をひっくり返したようにごちゃ混ぜとなっていました。

息子さんが言います。「家の中の物は一切合切がれき置き場に捨てて下さい。品定めは無用にお願いします。はかどりません。訪問着?帯?もう着れない。捨てて下さい。

花入れ?茶道具?教室は閉鎖。もういりません」。

「そんなの見せだら、また、オイオイ母ちゃん大泣き、もう聞きだくねでばホントにかまねがら遠慮しねで全部出してもらって結構です」と声を張り上げます。私どもはそんなヤケになった息子さんの顔をまともに見られず横を向いていました。そんな訳で家の中の物は何もかもすべてがれき置き場に積み上げました。

ヘドロの掻き出し作業二日目です。

私は内心、「こんで、石巻立ち上がれるかな」と案じながらスコップを運んでいますと、スコップの先が「カチン」と音を立てたので、思わず作業を止め、しゃがんでヘドロの中を見ました。音を立てたのは焼き物のお地蔵さんでございました。それも次から次とひーふーみーの三体が続けざまに現れて参りました。どれも子猫ぐらいの大きさのお地蔵さんです。それを見て「地獄で仏、本当なんだな」と思い、軍手を外し素手でお地蔵さんをつかんでバケツの水でチャプチャプすすぎました。

よく見ると、色、形、大きさはまちまちです。でもどのお地蔵さんも素朴で優しい顔をしていました。この場面では息子さんを手招きしました。

私が濡れ縁に並べたお地蔵さんを一目見た息子さん「あ、母ちゃん作った手作り地蔵！物置に残ってたんだ。粘土をこねて釜で焼いてみんなに配ってたんです。人様にくれ散らかすのが趣味でこの物置に釜があるんです。さてと困ったな」と腕を組みます。

この時、元同僚の誰かが「物置に残ってだぁ！！。それじゃ波きり地蔵だべー。あの大津波から家を守ったんだ。瓦礫？罰あだっと！！」と息子さんを睨みます。「だめ、だめ、だめ、絶対だめ、母ちゃんに見せたらオイオイ三日は泣いてる。うーん。どうすっぺ。あっそうだ！！この地蔵さん。大沼さんのスコップにぶつかったんだから責任取って角田さ連れてって下さいよ。頼みますよ。やっぱり瓦礫バチあだる」と息子さん。三体のお地蔵さんを私に託しました。

ヘドロの掻き出し作業はいったん中断。北上川の水をバケツに汲んでもう一度ヘドロを洗い落としました。そして首のタオルと腰の手ぬぐいで包みまして、軽トラックの運転席にお移り頂きました。・・・このお地蔵さんが、その波切り地蔵です。残りの二体は、留守番をお願いしました。後ろに「愛」と有りますが、愛子さんと言う方が作者です。どうぞ手に取って、ご覧下さい・・・

石巻から角田にお連れして参りましたお地蔵さんは庭先に鎮座してもらいました。「花も供えないとな」と思いまして裏の竹藪に適当な竹を探しに行きました。竹の花入れを作るためです。目に止まったのは孟宗竹でした。細身、立ち枯れのさび色、節の間隔がつまった竹でした。その竹を揺すってみますと「グラグラ」と根元が動きましたので、オシ、道具なしで倒っせかなと思い、力を加え、揺すりますと「バキッ」と根元で折れてしまいました。

「しまったやはり道具をもってこればなー」と悔やみながら竹の根元に目を移しました。すると竹の中に祈りの姿が現れました。・・・この竹がその時の竹です。どうぞ手に取ってご覧下さい。ささくれひげ根は私が整理しましたがお姿は殆ど手を加えていません。

なお竹藪から生まれたものでございまして、私

は勝手に藪地蔵と呼んでいます。藪地蔵との出会いは「偶然」と思っていましたが、その頃からなぜか?、枯れ木、竹の根、朽ちかけた木に目が止まるようになりました。

山仕事に行く度、それらの枯れ木を持ち帰り、木子屋に大事にしまうようになりました。なお我が家は明治に建てた蚕農家でありまして、雨漏りに耐えきれず屋根こそ葺き替えましたが、その他は明治のまんまでございます。

今も庵に木をくべ暖を取っていまして薪の確保は私の大事な仕事です。

木小屋が枯れ木だらけになったそんな時に、南三陸町志津川の総合防災庁舎で殉職されました遠藤未希さんのニュースが耳に入りました。

自分の命を顧みず避難を呼びかける「叫び」に胸を打たれまして、何とも痛ましい。魂を鎮めないとと、いても立ってもいられない気持ちになりまして気がつきますと木小屋の枯れ木に手をのばしていました。その枯れ木をなたで切り、彫刻刀で削り遠藤未希さんの鎮魂像を仕上げました。出来たのは震災の年の6月末の事でした。遠藤未希さんの鎮魂像を作ったのがきっかけとなりまして、拾い集めていた枯れ木を日毎夜毎削ることになりました。

私は、学業は0点いたずら満点の悪童でございまして、ごしゃがってばーりいました。子どもをおどしつける時のうちの親の決まり文句は「神仏を尊び、神仏に頼らず」に始まり、「このぬわどり、なんぼ言ったらわかんだ、そござ座れ!!、ずごくにおどされっぞ!、針のむしろに座らさっれぞ、石の皮むがさっれぞ、べろ抜がれっぞ!味噌漬けてくわれっぞ!このたがらもの!!」と続きました。地獄がこわくてたまらず少しはおとなしたものです。でも信心深くはなく、ご先祖様と神棚に手を合わせるだけのぶじょほうな者でございます。

そんな私が「安らかに」の思いを込めまして、こつこつと彫刻刀を握り続けておりましたところ、震災から3年目には鎮魂像は300体ほどになりました。

そんなある日娘さんを津波で亡くされた70代のご夫婦が石巻から訪ねて参りまして、奥様がある像の前で足を止め「娘にそっくり、戻ったみたい」と涙を浮かべ喜んでくれました。

この像は松の木を削ったもので木は朽ちていました。その朽ちた部分を削り落としまして一心に

彫ったものでした。実際は私が作ったと言うよりも風雪と蟻さんムカデ君がかじって作ったものでございました。

自然が作る線はとっても素敵で惚れ惚れします。とても人間の手では出せないライン、あの天才ミケランジェロも脱帽するような像でございました。その像を奥様は「是非」と申しますので私は喜んで差し上げました。その後、礼状が届きまして「おかげさまで娘と一緒に居る気持ちになれて、今は趣味の手仕事も出来るようになりました。やっと笑えるようにもなりました」と結ばれていました。この礼状に力が湧きました。土に帰る木がご遺族の力に、「良し続けるべ」と、もともと短気で飽きやすく細かい仕事は大の苦手の私が「安らかに、どうか安らかに」と念じながら一人静かに彫刻刀を握り続け千体を目指しました。震災から4年目には千体に届きました。

ところが千体達成のこの日、目を疑うことが起きました。「三劫三(さんごうさん)千仏(ぜんぶつ)」と言う難しく聞いたことも無い文字が目に飛び込んできたのです。方丈さんのおられる場で、まことにおこがましく恐れ入りますが続けさせていただきます。

「三劫三千仏」とは、

三劫。この三劫の劫は「未来永劫」の劫であります。つまり、過去現在そして未来の三劫に、それぞれ千体ずつ、合わせて三千体の仏をあらわすことで、衆生つまり下々までみんなが往生できるとの教えでございます。ご存じの千体仏は、平安の貴族の方が自分一人、己のみが極楽往生すべく彫らせた物とありました。

日本歴史小百科『彫刻』と言う本に書かれていました。この本は私を陰で支えていてくれました、博識の先輩が古本屋で偶然見つけて私に届けてくれた本でございます。

この時先輩は、頭を抱えるだけの私に「千まで来たんだ、三千まで続けねどな、無駄になる。震災の犠牲者はみんなが往生できる。ご遺族の癒や

しにも。材料はすんぺすんな、枯れ木を集めればいいんだべ、まかせろ、おまえはただひたすら削り続けろ。「安らかに」の思いを込めてさ。一体一体に。下手で良い。思いを込めればきっと伝わる。犠牲者も浮かばれる。三千めざせ！」と肩をたたいてくれました。そして震災発生から5年間。おととしの夏には2千5百体を数えるまでになりました。

少し、肩の荷が軽くなった丁度その頃、たしかお盆の時、福島から年配のご夫婦が訪ねて参りました。

偶然とおりかかって立ち寄ったとの事でございました。一通りご案内をしまして、帰り際になった時、奥様が「何体お作りに？」とおっしゃいましたので「はい、三千体でございます」とお答えしました。その答えに奥様は怪訝そうな顔で「えっ三千体？。二万体ではなくて？」とおっしゃいます。私は金縛り。頭の中は真っ白、思考停止、声も出ません。

奥様は静かに真剣な眼差しで「震災の死者、行方不明者それに震災関連死の方々を集めると犠牲者は約二万人と聞いております。二万体彫っていただけないの？」と私の顔を見つめます。立ち尽くすだけの私。奥様は、そんな私に頭を下げまして「どうか娘の分も、実はまだみつからなくて」と、声を振るわせます。無言の私。何も言えませんでした。

我に返ったのはお二人の車が出た後でした。車のナンバーを目で追い、いわきナンバー。ご遺族か？「がんばります」と言えねがった。2万は無理だし、約束は出来ねし、んでも嘘でも良いがら「なんとかがんばります」と言ってやればいがったなー。あんなにがっかりすねで帰れたべなー。んでも声がでなかった。「なじょしたら、いがったんだべ」と、ため息の一日となりました。

この日から、耳の奥に「どうか娘の分も」との声が聞こえてなりません。その度に「数に拘るな、祈りを込めて、ひたすらでいい」と自分に言い聞かせました。そして彫刻刀を握りますとなぜかその声は消えてくれました。夜なべ仕事を続けましてこの年の12月17日三千体となりました。しかし、達成感は湧きません。ふと手元の像に目を戻しました。三千体目の像は萱材でございました。萱材をくれた方は私の友人でこの年の秋、突然亡くなった大工さんです。そうだ。まず大工さんに三千体達成を報告しねど、あれ、49日にあたり日、いつだっけ？とカレンダーを見るとあたり日は12月18日でした。「あっ、明日だ、線香立てねど」と我に返り

ました。

翌日、早速参上。お位牌に報告を致しました。その帰り際、大工さんの息子さんが「親父が拾ってたクルミなんです。このクルミでなにか出来ねべか?」とクルミを持ってきたので有りがたく頂いて帰りました。家に戻りクルミを割って中の身を取り、ふとクルミの殻を見ると

割った断面に手を合わせる姿が見えました。その姿におもわず頭が下がり「あーおほどげさん、続げっからないん」と自然に声が出ました。クルミの中の姿を発見した時に二万体を目指す決心がつきました。

この日から、迷わずただひたすら彫刻刀を握り続け、今現在「3.11鎮魂像」は5千二百体を数える事になりました。

省みますと絵も描けない図画工作の通信簿は、お情けの「2」。日曜大工は不得手不器用の見本。その私を突き動かしたのは自分の命を省みず避難を呼びかけた遠藤未希さんの「叫び」でありました。そしてまた津波で娘さんを亡くされたご遺族から届いた手紙とご遺体がまだ見つからないご遺族の悲痛な言葉が、自分自身予想だにしなかった2万人におよぶ尊い命を奪った3.11の犠牲者と同数の鎮魂像を目指す力となりました。

今、現在5千体を超えたとは言え、残るは遙か彼方、気が遠くなりそうです。とてもとても生あるうちに達成はかなわないと存じます。しかしながら、言葉では上手く言い表せない不思議な縁によりまして、彫刻刀を手にする事になった者のつ

とめとして一体でも多くの鎮魂像を作ることが御仏の導きにかなうものと思います。

そしてそれが犠牲となりました方々の魂を鎮め、ご遺族の悲しみを少しでも和らげる事になるのならこれに勝る喜びはありません。精進を積み重ね、ひたむきに歩めばいつの日かきっと2万体に届くかもしれません。その時まで諦めず彫刻刀を握り続けて参ります。合い言葉は「忘れない。二万の思いとたましいを」それが今の私に出来ることでございます。

つたない話に耳を傾けて頂きました皆様に対し、心から感謝申し上げまして、おわりと致します。

誠にありがとうございました。

合気道「古流・夢想神伝流」

鐘を撞くという事に・・・平成29年4月5日

おはようございます。

先日、鐘をつく撞木を吊している鎖が切れて朝夕の梵鐘を一週間ほど休ませていただきました。

ご周知の通り、現在の梵鐘は二〇〇一年年に21世紀平和祈念鐘という名称で新しく鋳造した梵鐘です。

ですから、計算をしてみますと二〇〇一年から

二〇一七年まで16年間梵鐘をついて来た撞木の鎖ということになります。今回どうした拍子か鎖が切れ、皆様方にはご迷惑をかけましたが、一週間のお休みをいただき新しい鎖に換え撞木を吊り直し、また朝夕鐘を鳴らしております。

ところが撞木が梵鐘にあたる角度や位置が今までと変わったのか、どことなく鳴りがいまひとつ思うように鳴りません。あれこれ工夫しておりますが、まだ一定の音色で鐘を鳴らせないでおります。申し訳ないことだと思います。

考えてみればその日の天気、温度、湿度、あるいは撞木を振り上げ振り下ろす力の具合、また撞く人の感情と申しますか心の置きどころの具合で鐘の音色が違うように思います。ともあれ毎日同じような音色と響きで鐘を撞くという事は大変難しいことだとつくづく感じております。

さて道元禅師が著した『普勧坐禅儀』には「坐禅は習禅にはあらず」という有名な言葉が出てきます。この言葉は「坐禅とは戒・定・慧の三学の定の坐禅ではないぞ。また六波羅蜜の禅定の禅ではないぞ。悟りを得ようとする坐禅でもなければ心を静めようとする坐禅でもないぞ。」という意味でありましょう。

そうであるが故に、いはゆる禅定と言われるような習禅を離れてさらに正伝の坐禅を組むと言うことはなかなか私どもには難しいことです。むしろほとんどが習禅の気持ちで坐禅をしている有様ではないかと自省するばかりです。

朝夕毎日鐘を撞いていても同じ音色で鐘が鳴らない。毎日行じていても同じ坐禅ができない。難しいことだと思います。しかし、だからこそ毎日鐘を撞き、毎日坐禅を組む理由もそこにあるわけです。先年、おかくれになられました永平寺の宮崎奕保禅師は、「毎日がまねごとの坐禅だとしても一生まねごとの坐禅をすれば本物の坐禅になる」とお示しされました。ですから、やがて本物の坐禅になるかどうかは毎日のこの日々の勤めの日にあると私もそう信じて生きている次第です。

桜の花も綻び始めました今年も佳い季節が巡ってまいりました。

道悟桜・・・平成29年5月3日

おはようございます。

長泉寺の坐禅堂のすぐ前に一本の桜の老木が立っています。私たちはこれを道悟桜と呼んでいます。道悟桜の名前の由来について私はよくわかりませんが、道悟と言う方は38世黙庵道悟（もくあんどうご）大和尚様のことであろうかと思います。道悟和尚様は明治27年7月にお亡くなりになられていることが記録でわかっております。

この方丈様が植えたのでそんな由来の名がついた桜なのかと私は勝手に考えております。ともあれ長泉寺の桜で一番早く、しかも冴え冴えしたピンク色の見事な花を咲かせてくれる大切な桜の老木です。

しかし近年ますます木が年老いてくるのが素人の私にもよくわかり、庭を管理されている庭師の方からは「方丈さん、早くこれを倒さないと坐禅堂の建物を壊したりあるいは場合によっては風で飛ばされて大切な本堂を痛めてしまいますよ」と処分を毎年のように促されております。けれども見事なその枝ぶりと花の美しさに、いつも春の季節になると「どうしたらよいものかなぁ」と迷っては、「いやいやまた来年咲かせてくれるのを楽しみに待ちたい」。そう思い、倒すのを断念しております。

今年も桜の季節が終わりました。花が散った後には青々とこの道悟桜は他の桜と同じように綺麗な葉をその木にしたされております。

さて坐禅堂の瓦は6年前の震災の時に大部ずり落ち、屋根の下地も痛んでいるように思い検査をしていただいたら、「やはり屋根替えの時期ですね」と大工さんに言われました。「屋根替えをする時にはこの桜を切らなければなりません。先代の方丈様が昭和54年にこの坐禅堂を再建した時に、この桜を保存しようと思ったのでしょう。桜の幹に屋根が当たらぬようにしたために軒が少し短いです。だから少し強い風雨が降った時、あるいは台風の時など雨が坐禅堂の中に入りやすいんですよ。この桜を倒してもっと軒を深くしないと坐禅堂が大変なことになります」。このようにも大工さんに言われてしまいました。毎日庭に出ては、この桜と「どうしたら良いかなぁ」とお話をするこの頃です。

五感で聴く・・・平成29年5月23日

おはようございます。

新緑のいよいよ美しい季節となりました。朝早く目覚めてみますと色々な小鳥のさえずりがあちらこちらから聞こえてまいります。鳴き声のする方を見ても鳥の姿は見えません。しかし色々なさえずりの音が聞こえて参りますから色々な種類の鳥が森には住んでいることがわかります。さえずりの声を聞いてこれはなんという小鳥の声か、どんな意味のさえずりなのか、それがわかれば楽しいし嬉しいと、そう思うことがあります。

さて先日観音講の集いがございました。その中で「聴く」と言う字についてお話をしました。これは耳へんの聴という字、視聴覚の聴という字のお話です。耳へんに作りのほうの上には十という事を書きます。これは心のアンテナを表しています。その下の漢数字の四に見えるのは目を横にした字です。そして、その下に一、その下に心と書く。つまり耳だけではなく心のアンテナを立てて、目、心、そういう五感を一つに集中して聞くこと、これを聴くというお話をしました。

以上は、臨床仏教研修講座で神仁先生から教えていただいた話です。ですから私たちも人とお話をする時、あるいはいろんな動物とお話をする時、また最近はやりの「傾聴」と言われる聴き方とは耳だけでなく五感を集中して聞くことです。その癖をつけてみましょうとお話をさせていただきました。心を通わす聴き方、また話し方も同様と思います。

ですから、お墓やお仏壇やお寺にお参りした時にもただ無言でご先祖様や仏様に手を合わせるのではなく、「ご先祖様や仏様とお話をしてみましょう」「ご先祖様や仏様の声を聞いてみましょう」と言うお話をさせていただいたのです。そうすると必ず私たちはご先祖様や仏様とお話が出来、同じ境涯に立つことができて、ここに私だけが一人で生きていると言うのではない。ご先祖様、仏様の力で今ここにこうして生きている、その感謝が私たちに生まれてくるような気がいたします。

さて名古屋にあるお寺（桂芳院）に愚痴聞き地蔵がお有りになることを知りました。お寺の片隅にその小さなお地蔵さんは静かに立っておりまして、周囲からは見えないように工夫されていた

ように思います。夜になると会社帰りの人などがお地蔵さんにお参りにあらわれ、座っていろいろなその日の出来事やあるいは面白くないことをお地蔵さんに向かって愚痴るわけです。人生を語るわけです。お地蔵さんのそばには柄杓があって、その柄杓でお水をかけそしてお地蔵さんに手を合わせて何かを願う人もいます。そして、ややしばらくお地蔵さんとお話をして心がすっきりとして帰られるようです。こんな愚痴聞き地蔵さんがあるお寺の様子を何年か前にテレビで拝見しました。このようなお地蔵さんが長泉寺にも来て欲しいと思っておりますが、まだ愚痴聞き地蔵さんは長泉寺にはおいでになっておりません。

「仏仏不言」と書いて、ぶつぶつ言うなと言いますが「仏仏言う（ぶつぶついう）」こともまた大切な事だと思います。

百日紅・・・平成29年6月1日

おはようございます。

山門をくぐりお寺の本堂に向かって参道右側に樹齢何年になるかよくわかりませんが、百日紅（さるすべり）の木が一本立っております。昨秋すす病という病気になったと庭園を管理されている植木屋さんから教えられ、「なんとか生かして下さい。」とお願いしました。そうしたら、すす病にやられて真っ黒くなったその樹皮をこともあろうに年末の寒くなった時期に全部剥ぎ取り、まるで因幡の素うさぎのようにされてしまいました。

これで一体大丈夫なんだろうか？寒さで枯れるのでは？と私は非常に心配をしました。病気で元気が無くなった枝なども若干切りとられてしまったからです。けれども桜の花が終わる頃から少しずつ枝の先から芽が吹き出て、今では今年もこれでは花を咲かせるかなと言うほどに葉が勢い良く出てきました。。

以上は、臨床仏教研修講座で神仁先生から教えていただいた話です。ですから私たちも人とお話をする時、あるいはいろんな動物とお話をする時、また最近はやりの「傾聴」と言われる聴き方とは耳だけでなく五感を集中して聞くことです。その癖をつけてみましょうとお話をさせていただきました。心を通わす聴き方、また話し方も同様と思います。

ですから、お墓やお仏壇やお寺にお参りした時にもただ無言でご先祖様や仏様に手を合わせるのではなく、「ご先祖様や仏様とお話をしてみましょう」「ご先祖様や仏様の声を聞いてみましょう」と言うお話をさせていただいたのです。そうすると必ず私たちはご先祖様や仏様とお話が出来、同じ境涯に立つことができて、ここに私だけが一人で生きていると言うのではない。ご先祖様、仏様の力で今ここにこうして生きている、その感謝が私たちに生まれてくるような気がいたします。

専門の方はさすがだなと驚くばかりと同時に、瀕死の状態になっても植物はこんなにも生命力があるのだと、つくづくその百日紅の生命力に感動しています。

また、その隣には、もう半分以上幹が腐れてまるでやせ細った老人のようになった桜の木があり、その桜も毎年花を咲かせてくれます。二本とも幹を支えの棒でつっかえをしなければ倒れそうな木ですが、植物の命というか、自然の命というものはすごいものだとただただ驚くばかりです。

その木々を見るたびに最近「終活」という言葉をよく耳にしますが、私たちの終活というのは一体どういうことなのかなと考えてしまいます。

失礼をいたしました。

阿武隈急行・・・平成29年7月4日

おはようございます。

梅雨のこの時期、丸森駅から福島県の兜（かぶと）駅に至る、いわゆる阿武隈川渓谷を阿武隈急行線に乗って電車の一人旅をするのが好きです。

古くなった車両がガーガーと喘ぎ声を出しながら車輪の音をギーギーと立て電車は阿武隈川渓谷を縫うように走っていきます。「五月雨をあつめてはやし最上川」ではありませんが、こちらの景色

もなかなか良いものです。東京の方へ出かける時には私は殆どこの阿武隈急行線を利用して角田から福島駅までの約１時間の旅を楽しみにしているのです。

私の長男が小学６年生の晩秋の頃、丸森駅のすぐ隣に住む先生のお家へ独りで電車に乗って遊びに出かけたときの話です。

やがて夕方になり、その帰りどうしたわけか角田に帰る電車と福島行きの電車と間違えて乗ってしまい丸森駅の次の「あぶくま駅」ではっと気がついたのでしょう。でもそこは無人駅であたりも淋しいし、子供ながらここで下車したらまずいと驚いて、次の兜駅に着いたら辺りには民家が見えるので、ここで車掌さんにお話をして下車をし、近所の家に助けを求めて入りました。

そうしたらそこのＳさんは親切な方で、わざわざお寺へ「あなたの息子さんを保護しております」と電話を入れて下され、そこで我が家は大騒ぎになった事件がありました。そんな事をなつかしく思い出すのもこの景色の中なのです。

いま、長男は2児の父親となり、長女は幼稚園の年少組です。この子供達も大きくなるまで、またいろんなハプニングを起こすことがあるかもしれません。そんな時、自分も小さな頃にビックリ小旅行をしたっけと、父親となった長男も思うに違いありません。

ともあれ3人の子ども達がそれぞれに小さな時には私も子育ての良い経験をさせてもらったとなつかしむ年齢となりました。

私も自然を眺めながら色んな事を思い出したり、考えるのが好きになりました。

日光東照宮・・・平成29年7月12日

お寺の観音講の講員の方々30名を引率して日光東照宮を参拝してきました。

さいわい天気にも恵まれ、親切な巫女さんの案内で美事に修復された陽明門をじっくり拝観させていただきました。

さて、二層建ての陽明門の中央には高欄と呼ばれる欄干があり、「唐子遊び」と言われる有名な子供の彫刻が横一列に並んでいます。中国風の服を着た子どもたちが、鬼ごっこやジャンケン、木馬遊び等々、楽しく遊びに興ずる姿が生き生きと彫られています。

遊ぶ子供の姿は平和な世のシンボル。それを彫刻で表現することによって、未来永劫、人々が平和に暮らせる社会を作り上げることが徳川幕府の目指すところとアピールしたとのこと。巫女さんの説明に一同感服しました。

時代は変わろうとも仲良く遊ぶ子供の姿は平和のシンボル。とくに幼稚園生活の中にあっては遊びの中に学びの全てが含まれています。子供の遊びは生活そのものです。

私達も徳川家康公になった気分で、いま一度子供の遊びの価値を見つめ直し、清らかな心で正しく生き、自分自身に誇りを持つ人間になれるよう子供を育てて欲しいと思います。

そのためには、私達大人は子供たちが安心して仲良く遊べる環境作りに努力する義務があります。子供の「いじめ」の責任は学校だけにあるのではなく、私達一人一人にあることを改めて痛感した陽明門拝観でした。

エンディング産業展・・・平成29年8月30日

おはようございます。

先日（8月23日）、東京ビッグサイトで開催中のエンディング産業展を見学してきました。その様子の一部は当日のNHKニュースによりテレビで紹介されました。世間での関心の高さが伺えますが、展示タイトルの示す通り、それはあくまで葬儀に関する「産業展」であって宗教とは切り離されたものであり、それはそれで興味深く見学してまいりました。

まず第一に来場者の多いことに驚かされました。

大別すると、①業界関係者、②僧侶など寺院や教団関係者らしき者多数、③一般、④ひやかし、になります。エンディング関係の産業展ですから仏式のみならず神式、キリスト教式、その他の宗教式とあってしかるべきと思うのですが、大部分が仏式関係の展示ブースばかりでした。また創価学会、立正佼成会、幸福の科学等々、明治期以降の比較的新しい教団関係に関する特別なブースは見当たりませんでした。

理由としては、新しい教団に於いてはそれぞれの教団内部で市場が確保されており、新規参入する隙がないからではないでしょうか。

第二に、各ブースを見ると、①法具（仏具）関係、②石材関係、③霊柩車関係、④納棺関係（棺、納衣、骨函、骨壺等）、⑤写真関係、⑥遺体一時保管関係（冷蔵庫、冷凍庫等）、⑦祭壇周囲関係（仏壇、祭壇、生花、照明、音楽等）、⑧ヨ関係、⑨遺言書関係、⑩仏事相談コーナー、その他となります。

まるでおもちゃ箱をひっくり返したようににぎやかで多種多彩。これまでの伝統的な品々を無理矢理斬新的な色彩やデザインにしたものがずらりと並び呆気にとられてしまいました。けれども意味的にはそれらの物は昔と今と大同小異でほとんど変わるものでなく、特に惹かれるものではなく残念に思いました。僧侶の格好をして、たどたどしい発音で般若心経を読経するヨロボット君がいましたが、そこにこのエンディング産業展が象徴されていたように思います。

すなわち、エンディング産業に宗教は不在。むしろ不要と言うことです。セレモニーに珍しさだけを添えるだけの産業展だとすれば何と底の浅い業界なのだろうかと残念です。

むしろITロボット僧侶は、現代の我々僧侶に対するブラックジョークだと考えれば、私達はこれを真摯に受け止めなければなりません。つまり、修行のあとがその後の僧侶としての生き方に滲み出る僧侶、仏心、慈悲心のある僧侶、そしてお経の上手い、仏教のことなら何でもお話できる僧侶になるべき努力を不断に怠ってはならぬことを自戒すべきでありましょう。

この意味で、唯一、浄土真宗（西）本願寺のブースがあってお寺や僧侶に対する意識調査のコーナーを設けていたのには嬉しさを覚えました。

こういう場においてこそ私達僧侶は私達を取りまく社会から学ばなくてはならないとする姿勢が

見てとれました。姿、形だけのお坊さんでは生きていけない時代です。既成仏教のお坊さん達がもっと来て欲しかったエンディング産業展でした。

貪らない・・・平成29年11月30日

おはようございます。

六月より長らくのお休みをいただいていた長泉寺の梵鐘ですが、ようやく撞木の修理が完了し、再び皆様へ鐘の音をお届け出来るようになりました。

11月25日の夕方5時から調整のための鐘撞きを再開し、12月1日朝6時より正式に朝夕の鐘を鳴らす事といたします。毎年恒例の大晦日除夜の鐘は12月31日午後11時からとなります。昨年同様、多数の方のご来山ご参加をおまち申し上げます。

なお、新しい撞木は坐禅堂屋根瓦工事に伴い伐採された、いわゆる道悟桜の幹を利用したものです。梵鐘の一音、一響、その桜を知る者にとっては感慨深い音色となることと思います。

さて、私事ながら秋頃より体調がすぐれず、お檀家の皆様には元気なそぶりで接する努力をしている一方、午後には体力の風船がしぼむように布団に横になる生活が続いています。加齢と言えばそれまでですが、何とも情けないことです。

今回は、次の文章を引用させていただき、読者の皆様のお許しをお願いするばかりです。

例えば初詣で。お賽銭を投げながら頼みごとだけ山ほどしていないか。何かの寄付をする。寄付者名や寄付額が発表されるかされないかで、寄付額が大きく変わる。寄付とひきかえに名誉を買っていることになっていないか。車中で席をゆずることさえ、「ありがとう」の一言の礼を期待している。まぎれもなく貪りの心である。

一歩進めて「貪らずとはへつらわざるなり」と説かれる。貪りの心の奥にわが身かわいい思いが居すわり、そのためのへつらいである。諂笑といって、笑うことにさえへつらいがまじりこむ。道元禅師はそこを見逃さない。禅師の秀徹した眼に照らされ、こころして新しい年を迎えたい。

青山 俊董 著『あなたに贈る 人生の道しるべ：続・